

的に胃切, 迷切, 幽門成形術を植移術中や, また 1 次手術において施行した例もある。

低温と虚血時間についてはのべたが, 移植肝の肝細胞の破壊の様相を血清トランスアミナーゼ値で窺うと, 直後に 2000 前後となることで, 肝の保存がよくないことが表現されている。この異常値は日とともにしだいに低くなるが, 動物の長期生存例では, 一般にはるかに低値であり, 恐らく rejection 現象の発来のためか週期的に高値を示すのと対照的である。また血中ビリルビンがしだいに増して最高は 42 mg% にも及ぶが, 動物での 200 日前後における 4 mg% 以下という事実と併せ考えると, 移植肝の保存に大きな課題を残しているといえる。

血糖値はほぼ正常であり, 肝機能のいずれをとりあげても, 日とともに一応は正常化に向っていると考えられる。

免疫反応抑制剤としてはイムラン 4.5 mg/kg とプレドニソン 30 mg を当日, 維持量としては 1.5~6 mg/kg のイムランと, アクチノマイシン C が間歇的に使用されており, その他の対策として移植前の胸腺摘出や, 術中に脾摘が行なわれている。

剖検所見では肝のみについてのべると 1 例が広汎な自己融解をしているほか, 他は少しく肥大した状態で 1 例は総胆管に欠損を生じていた。顕微鏡的には肝内胆汁うつ滞があり門脈周辺は白血球遊出があるが, リンパ球やプラスマ細胞というよりむしろ好中球である。動物では, 臨床例と異なり多彩で, 肝構築の乱れ, 中心静脈を中心とした壊死, 門脈周辺のリンパ球様細胞の浸潤がみられるが, これは無処置や長期の場合である。

rejection 現象からみた肝の臓器特

異性として, 無処置犬では組織学的には 10 日前後から rejection 様現象が次第に著明になってくるが, 機能的には, はつきりした荒廃を示さない。臨床例では, この程度の生存日数では rejection 現象か, 手術手技の欠陥による現象か, 判然としないと思われる。

肝のような複雑な機能を持つ臓器では, 移植後の生化学的変動の意味づけも難解で, 免疫反応抑制剤そのものも肝には有害性であり, ここに rejection 現象がからみ合うので, 慎重な検討を要するであろう。

腎移植時には rejection crisis のときには人工腎で危期はのがれられようが, 複雑な肝では動物(ブタ)を用いての灌流がようやく開発された

現況で, 人工肝とともに肝移植は現代外科の 1 つのトピックであろう。

文 献

- 1) Starzl, T. E. et al.: Experimental and clinical homotransplantation of the liver. Ann. N. Y. Acad. Sci., Vol. 120, Art., 1, 739~765, 1964.
- 2) 菅原克彦・他: 同所同種肝移植の実験的研究. 外科, 27, 1255~1265, 1965.
- 3) Starzl, T. E. et al.: Factors determining short and long term survival after ortho topic liver homotransplantation in the dog. Surg., 58, 1, 131~155, 1965.
- 4) Marchioro, T. L. et al.: Physiologic requirements for auxiliary liver homotransplantation. S. G. O., 121, 1, 17~31, 1965.

●ニュース●

順天堂大学小児外科教室新設

欧米に比べ 30 年の遅れがあるといわれる日本の小児外科も, ようやく 5 月 9 日から順天堂大学小児外科教室の外來診療のスタートにより, 小児外科専門医の養成の道が開かれた。

小児外科領域は比較的新しい学問で, 一昨年に日本小児外科学会が誕生して, 今年で 3 年目になる。以前は小児とくに新生児は大手術に耐えられず手術を行なえば死ぬと一般的には考えられていた。しかし長年にわたる研究から死亡率は著しく改善されて, さらにめざましい進歩をとげている。今日においては, 新生児や乳幼児も大手術に充分耐えられ手術は可能になっていることは言うまでもないことである。

このような状況にあつて小児外科が独立した診療科目として第一歩を踏みだしたことの意義は誠に大きくかつ, 将来に対する期待も少なくない。

今度, 開設された順大の小児外科教室は, 教授に駿河敬次郎氏(賛育会病院外科部長)助教授に小出来一博氏がそれぞれ就任し, それに医局員 10 数名のスタッフと, さらに小児麻酔の専門には, 里吉光子助教授が担当している。小児外科病室は, 小児病棟のうち約 30 病床をもち, それが新生児室, 乳児室, 母子室, 幼児室, 重症緊急室にわかれ, 酸素完全供給管, 酸素 Tent, 自動人工呼吸調節器の設備を備えている。